河内舊市邑
倭琴彈原
白鳥陵決定勘註

ル 3
3008

本年第百三號太政官御達ニ付御陵墓地
經界并皇妃皇子皇女御墓并寳地取調之
爲剥紙圖面ヲ以通報之夫々見込書を添可
御確定相成度此段相伺候也
明治七年十二月十六日　[illegible]縣令[illegible]

教部大輔宍戸璣殿

追テ右剥紙圖面[illegible]

本年第百三號太政官御達ニ付御陵墓地
經界並皇妃皇子皇女御墓等實地取調候
處別紙圖面之通有之夫々見込書相添候間
御確定相成度此段相伺申候以上
明治七年十二月廿六日　堺縣令税所篤

教部大輔宍戸璣殿

追テ河州志紀郡ニ別而古墳多有之候得共

沙 決

口碑流傳等モ無之即今所考モ無之候間追て
取調可申伺候宇度墓黒山墓之両所ハ既ニ内務
税寮ヘ相伺除税相成居候間為参考別紙乃進達候

伺之趣高鷲原陵観心寺陵磯長墓宇
度墓白鳥陵埴生岡上墓六ヶ所境地取廣并
定方ハ見込ノ通更ニ圖面相添詳細内務
省ヘ可申立獅子窟寺以下九ヶ所ハ實地
檢査ノ上可及沙汰尤差出候圖面ハ為参
考凢ラ當省ヘ留置候事

但磯長墓宇度墓埴生岡上墓ハ掌
丁申付人名可届出白鳥陵ハ最寄
陵墓掌丁ヘ兼務可申付事

明治八年三月八日

教部大輔宍戸 印

○図面ハ堺縣陵墓註進
甲印ヽ綴置

中

堺縣陵墓註進抄

(七大)

甲

堺縣陵墓註進抄

白鳥之陵

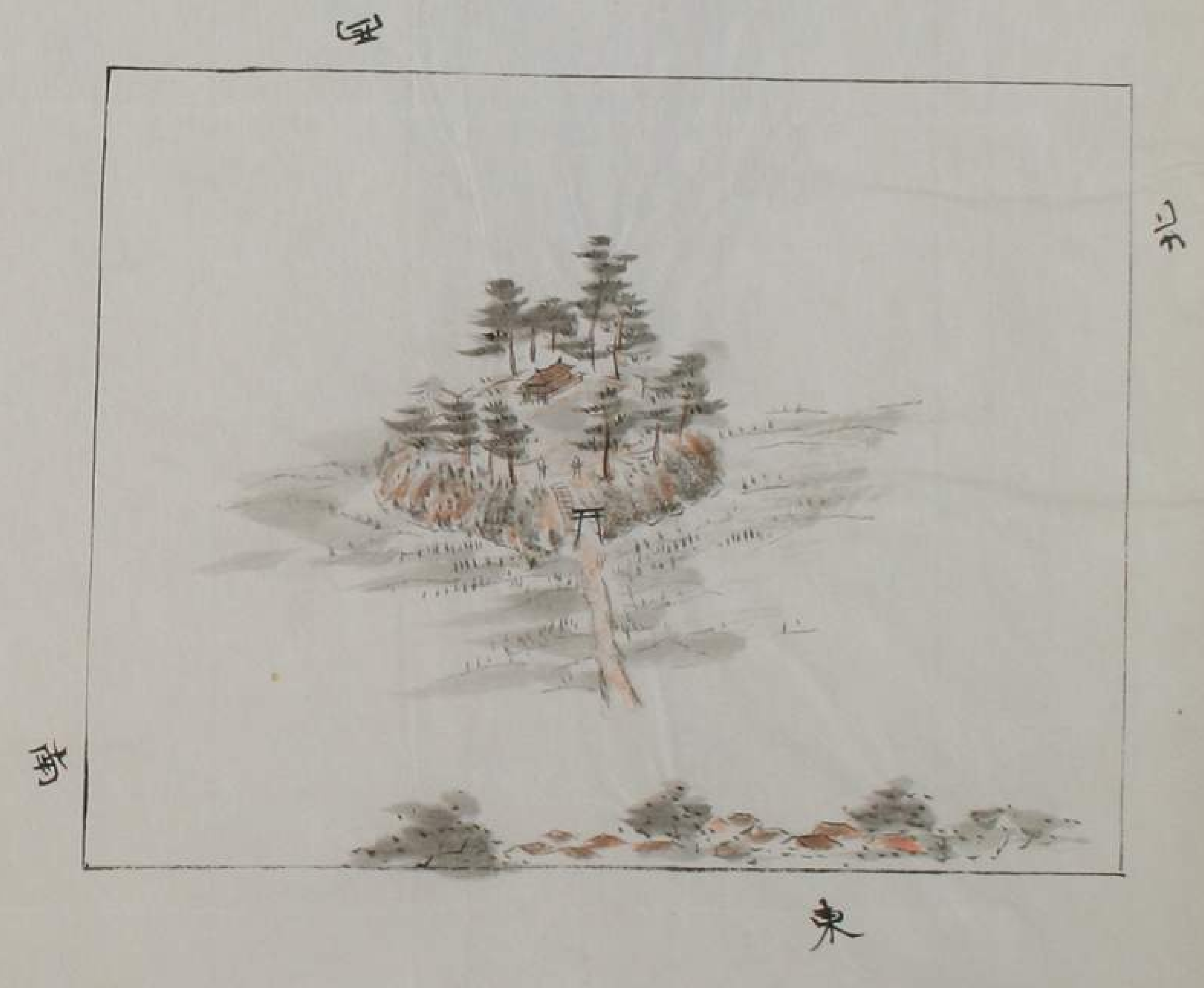
景行天皇紀 日本武尊崩于能褒野時年三十云々即詔群卿命百寮仍葬於伊勢国能褒野陵時日本武尊化為白鳥従陵出テ指倭國而飛云々遣使者追尋白鳥則停於倭琴弾原仍於其處造陵焉白鳥更飛至河内留舊市邑亦其處作陵故時人号是三陵曰白鳥陵

河内國古市郡古市邑西北ノ方ニ在陵上平地有祠白鳥大明神ヲ祭ル古松其他老樹多ク欝葱タリ

河内志ニ云白鳥陵在古市郡古市邑陵上有祠称伊岐宮 泉州大鳥神社流記曰石津者 孝徳天皇造伊岐

宮之日其石從讃岐國運置此津仍名則當知古
昔營構宏大壯麗也ト又陵墓一隅抄ニ云白鳥冢
河内舟南郡野々上邑東伊岐谷古墓上有祠今迄于
古市邑墓尚存スト云リ

河州古市郡古市村白鳥神社縮圖
境内段別四段壹畝貳拾歩
除税馬場先道敷反別七畝壹歩
周圍間數百三十四間五分


西
北
南
東

陵
永久保存
十二月廿一日 決判
十二月廿八日 達濟
宮内省陵墓

陵第七百八十七号

宮内省庶務課 第二六六四號

明治十三年十二月廿五日　御陵墓懸

卿　輔　書記官　掛書記官　属

五十瓊敷入彦命宇度墓并日本武尊
河内国白鳥陵改正之件

本年五月当陵墓実地検査トシテ出張致候五等属
大澤清臣ヨリ右宇度墓之儀別紙考案差出候ニ付
取調候処右考證精確ニシテ其実ヲ得タリ

宮内省

可伺出此旨相達候事

一 日本武尊河内國白鳥陵ハ元教部省ニ於テ御残
甲印勘註ニ拠リ同國古市郡古市村ヘ決定相成候處
右紙乙印清臣考案ノ如ク今現在ノ地ハ旧西林寺跡ニシ
テ此白鳥陵ニ縁故ノ遺蹟ニコレナキ事ニ付該府
四至ノ明文ニ瞭々タルニ因テ該地ハ断然除籍ノ上更ニ同
郡軽墓村字軽墓山ヲ以白鳥陵ト改定ニ相成可然哉
ト相考候條左ニ地方官ヘ御達案ヲ添相伺候也

御達案

其縣下和泉國日根郡淡輪村字東ノ陵五十瓊敷入彦命
宇度墓ト決定且河内國古市郡古市村日本武尊白
鳥陵之儀ハ今般詮議之次第有之取消更ニ同郡
軽墓村字軽墓山ヲ以テ白鳥陵ニ改定候條自今並
掌丁付置取締可致尤兆域見込相立実測絵圖面相副

明治十三年十二月四日

五等属 大澤清臣
七等属 大橋長憙

五十瓊敷入彦命宇度墓在所考并日本武尊河内國白鳥陵改定案御回覧之件

右考案二冊入御回覧候御掛り各君ニ於テ可然御討議御取捨被下度候也

甲

河内國古市郡古市村

白鳥陵勘註

河内國古市郡古市村

白鳥陵

書紀景行巻四十年夏六月東夷多叛冬十月壬子
朔癸丑日本武尊發路之畧中逮于能褒野而痛甚之
云々既而崩于能褒野時年三十天皇聞之云々即
詔羣卿命百寮仍葬於伊勢國能褒野陵時日本武
尊化白鳥從陵出之指倭國而飛之羣臣等因以開
其棺櫬而視之明衣空留而屍骨無之於是遣使者
追尋白鳥則停於倭琴彈原仍於其処造陵焉白鳥
更飛至河内留舊市邑亦其處作陵故時人號是三

陵曰白鳥陵然遂高翔上天徒葬衣冠因欲録功名
即定武部也是歳天皇践祚四十三年焉
古事記自其幸行而到能煩野之時思國以歌曰云
々此時御病甚急爾御歌曰云々　歌竟即崩爾貢上
驛使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵即
匍匐廻其地之那豆岐田而哭云々於是化八尋白
智鳥翔天而向濱飛行爾其后及御子等於其小竹
之苅杙雖足跳破恚其痛以哭追云々故自其國飛
翔行留河内國之志幾故於其地作御陵鎮坐也即
號其御陵謂白鳥御陵也然亦自其地更翔天以飛

行
紀記ニ記サル、所右ノ如クニテ日本紀ニハ
大和ノ琴引原ト河内ノ舊市トニ所ヲ挙ゲ古
事記ニハ河内ノ志幾（即古市也）ヲノミ挙テ琴引原
ハ漏タリ此ハ日本紀ノ傳ノ委シキニ依ルベ
キコト論無シ舊市ハ和名抄ニ河内ノ國古市ノ郡古
市ノ郷是ナリ志幾ハ和名抄ニ河内ノ國志紀ノ郡志
紀ノ郷是ナリ古市郡ハ志紀郡ノ南ニ連キテ今
モ古市ト云地志紀ノ郡ノ境ヨリ遠カラザレバ
上代ニハ其アタリマデカケテ大名ヲ志紀ト

ゾ云ケムサレバ舊市ノ邑トアルモ志紀ノ内ニ
テ異地ニハ非ズサテ此御遺蹟ハ河内志古市ノ
郡ノ部ニ白鳥陵在古市村陵上有祠称伊岐ノ宮ト云
々トアル是也（伊岐宮ノヿハ次下ニ云ベシ）明治六年五月臣
等巡回シテ古市村ニ至リ實地ヲ檢スルニ御
陵ハ村ノ西北ニアリ墳上イタク引平シテ一
祠ヲ建ツ社號ヲ伊岐ノ宮ト称スルヿ河内志ノ
説ノ如シ堺縣ノ註進ニ境内反別四段壹畝貳
拾歩除税馬塲先道敷反別七畝壹歩周圍間数
百三拾四間五分トアリ　域内古松其他老樹多
ク鬱葱タリ　臣等ツラ〱　此御陵ノ形勢ヲ察
スルニ今見ル所ハ四周皆田圃ニシテ中ニ一
堆ノ小丘（周圍凡百三十間余高サ直立凡二間余）ヲ存セルノミナ
レド此ハモト前方後円ニ築キタル陵山ナリ
ケムヲ前方ノ封土ハ已ク壞レ失セテ後圓ノ
ミ存リタルモノト考ヘラルサテ其ノ後圓ノ御
山モ後ニカノ謂ユル伊岐ノ宮ヲ移シ建ツトテ
頂上ヲ引平シテ弥體裁ヲ失ヘルニヤアラム
サテ陵上ノ祠ヲ伊岐ノ宮ト称スルニツキテハ
大ニ論アリ其ハ和泉國大鳥神社流記帳ニ本

社并神田敷地ノ四至等ヲ記セル文ノ中ニ上ノ限ハ
津川所謂石津者難波長柄豊前朝廷之御領伊（本ノマヽ）
岐ノ宮ヲ作ル料ノ石ヲ従讃岐國運置津（津ノ上此ノ字脱スルカ）也仍
名者下ノ限ハ益鏡ノ小川所謂益鏡者同朝廷為陵所
御賢（賢恐ラクハ覧ノ誤）行幸其間従輦件ノ小川ニ落入御鏡ヲ
也仍テ為名云々（此流記帳ハ延喜廿二年ノ古文書ニテ甚古色ノ物也然レ圧必誤字ナルベクオボユル処々見エタルハ轉寫ノ本ノ傳ハレル物ナルベシ又大島明神縁起帳ト云物アレド疑無キ偽書ニテ其記セル事ドモスベテ信ジがタキ物ナルヿ當省考證課考究ノ説アリ就テ見ルベシ）
ト見エ件ノ文他書ニ考合スベキ
物無ク文意モ熟クハ曉リがタケレド孝徳天

皇ノ御世ニ此ノ地ニ伊岐ノ宮ト云ヲ作ラルヽ料
ノ石ヲ讃岐國ヨリ運ビ置レタル所ヲ石津ト
名付タルヿト聞ユ石津ハ和名抄和泉國大鳥
郡石津（以志都）トアル是也今モ同郡ニ上石津下
石津トテ二村アリ為陵所御賢行幸トアル賢
ハ覧ノ誤ニテ陵所御覧ノ為此ノ地ニ行幸アリ
シヿハ聞エタリ陵所ハ謂ユル大坂磯長原ノ陵
ニテ諸陵式ニ大坂磯長ノ陵ハ難波長柄豊碕ノ宮ニ御
宇孝徳天皇在河内國石川郡ニトアル是也抑孝
徳天皇陵所ヲ定メ給ハントシテ河内和泉ア

宮内省

タリニ行幸アリシヿ物ニ見エズ又伊岐宮ト
云ヲ作ラレシヿモ他ニ所見ナキヲタマ〳〵
此ノ流記帳ニ記シ傳ヘタルハ賞ラシト云ベシ
サテ石津ノ地名件ノ流記帳ニハ孝德天皇ノ
御時ニ始マレル趣ナレド仁德紀六十七年冬
十月庚辰朔甲子幸テ于河内ノ石津原ニ定陵地丁酉
始築陵是日有鹿云々故號其處曰百舌鳥耳原
者其是之縁也（百舌鳥耳原諸陵式ニハ和泉国大鳥郡トアリテ今モ和泉ニ属ス此ハ古ヘト後ト國界ノ異レル也）トアルニヨレバ仁德天皇ノ
御時已ク石津ノ名アリシガ如シ此ハ後ノ地

名ヲ前ヘメグラシテ記サレタルニヤ猶考フ
ベシカクテ此伊岐宮ハ彼ノ流記帳ノ文ニ依テ
考フルニ神社トハ聞エズモシクハ行幸ノ為
ニ設ケラレタル行宮ニモヤアラン（然レ𪜈讃岐國ヨリ石ヲ運ブトアルヲ思フニカリソメノ營作トハ聞エズ猶考フベシ）然ルニ此ノ宮
ヲ日本武尊ヲ祀レルガ如ク云ヒナシタル説ア
ルハ大鳥神社ノ祭神ヲ日本武尊トスルノ謬
説ヨリ移リ来レルモノ歟大鳥神社ハ姓氏録
和泉國神別大鳥連ハ大中臣ノ朝臣同祖天児屋根
命之後也トアルガ動クマジキ據ニテ大鳥連

ノ祖神天兒屋根命ニ坐スヿ權大録栗田寛ノ
考證マコトニ争ヒガタキモノ也カクテ此ノ伊
岐ノ宮ノ旧跡ハ河内國丹南郡野々上村ノ東ニ
伊岐谷ト云所ニテ其所ニ小祠ノアリシヲ後
ニ古市村ノ白鳥陵ニ近ク祀レルヨシ土人ノ
傳説ナリ信ニ然ルヤ否臣等未ダ考究セザレ
ド畢竟伊岐ノ宮ヲ日本武尊ノ御社トスルハ全
ク臆度ノ説ト聞エレバ深ク尋ルニモ及バザ
ルヿナルベシ 古事記傳ニカノ河内志ニ陵ノ上ニ有レ祠称ニ伊岐ノ宮ト トアルヲ引テ伊
岐ノ宮トハ御陵ヲバ作リナガラ白鳥ハ注テ坐
御靈ニテ其ヲ祠レル宮ト云意ニテ生宮ノ謂

ニヤアラント云ヘル
ハ信ガタキ説ナリ 然ルニ今其ノ伊岐ノ宮古市村
ノ白鳥ノ陵上ニ現存セルハ神慮何如アラン甚
カシコキ事ナラズヤ神社明細帳ヲ檢スルニ
古市郡古市村白鳥神社神殿八尺四方拜殿梁
二間桁六間祭神日本武尊素盞嗚命稲田姫命
今云相殿二柱ノ神號ハイト心得ヌヿ也 勧請年紀不詳祭日六月
十二日九月九日社地東西三十六間南北三十
六間馬場長九十八間幅二間除地ニ社頭私營無ニ
神主ト記セリ此ノ帳ニハ白鳥神社トノミ記シ
テ伊岐宮ノ號ハ見エザレド拜殿ノ額面ニ伊

宮内省

岐宮トアリ抑〻大鳥神社流記帳ニ見エタル伊岐宮ハ他書ニ其名顕ハレズ由来詳ニ辨ヘガタケレド神社トハ聞エザルヿ上ニ論ヘルガ如クナルニ此宮ヲシモ日本武尊ノ御社ト臆斷シテ其ノ古蹟ニアリシ祠ヲ白鳥陵ノ上ニ遷シタルハ何時バカリノ事ニカアラン甚ミダリナル所為ナリケリ然レモ年来祭リ来レル社ナレバ御在所ヲ除キテ兆域中便宜ノ地ヲ點ジテ祠宇ヲ保存シカノ明細帳ノ如ク白鳥神社ト称シテ人民ノ私祭ヲ許サレン事コソ

穏當ノ御所置ナルベク考ヘ奉リヌ

○書紀仁徳巻六十年冬十月差白鳥陵守等充役丁。時天皇臨于役所。爰陵守目杵忽化白鹿以走。於是天皇詔之曰是陵自本空。故欲除其陵守而甫差役丁。今視是恠者甚懼之。無動陵守者。則且授土師連等トアルハ此ノ古市ノ白鳥陵ナルベキ事已ニ古事記傳ニモ説ヘルガ如シ臣等謹テ按ルニ是ノ陵自本空トテ陵守ヲ除カントシ給ヘルハ阿那可畏天皇ノイミジキ御過ニコソ阿那可畏阿那可畏

右河内國古市村白鳥陵實検勘註如件時習等再
拜頓首謹言

明治七年六月

少録 中島秉彝

權中録子安信威

權大録猿渡容盛

大録 山之内時習

明治九年四月 再挍訖

乙

日本武尊白鳥陵勘註

宮内省

（六十）

景行天皇皇子

日本武尊白鳥陵

日本紀大足彦忍代別天皇(景行)四十年夏六月東夷多叛冬十月壬子朔癸丑日本武尊發路之云云遠于能褒野而痛甚之則以所俘蝦夷等獻於神宮因遣吉備武彦奏之於天皇曰臣受命於天朝遠征東夷則被神恩頼皇威而叛者伏罪荒神自調是以巻甲戢戈愷悌還之云云既而崩于能褒野時年三十天皇聞之云云即詔群卿命百寮仍葬於伊勢國能褒野陵時日本武尊化白鳥従

宮内省

陵出之指倭國而飛之群臣等因以開其棺櫬而視之明衣空留而屍骨無之於是遣使者追尋白鳥則停於倭琴彈原仍於其處造陵焉白鳥更飛至河内留舊市邑亦其處作陵故時人號是三陵曰白鳥陵然遂高翔上天徒葬衣冠因欲錄功名即定武部也

古事記自其幸行而到能煩野之時思國以歌曰云々此時御病甚急尒御歌曰云々歌竟即崩尒貢上驛使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵即匍匐廻其地之那豆岐田而哭云々於是

化八尋白智鳥翔天而向濱飛行尒其后及御子等於其小竹之刈杙雖足跳破忘其痛以哭追云云故自其國飛翔行留河内國之志幾故於其地作御陵鎮坐也即號其御陵謂白鳥御陵也然亦自其地更翔天以飛行

按するに今の河内國なる白鳥陵ハ古市郡軽墓村にあり字を軽墓といひける前の山とかいへり高六丈五尺許周百九十二丈許隍のめくり二百七十六丈許ありとそこを前に引載する日本紀に白鳥更飛至河内留舊市邑亦其處作陵と

とえ古事記に飛翔行留河内國之志幾故於其
地作御陵鎮坐也 とあるなる墳墓なるを其在
所舊市邑と志幾と聊違ひたるが如くにていはゞ
給ひしなきことゆゑにやこの軽墓村の東北のかた
いはしらく志紀郡に號くきなるは日本紀にも
舊市邑と傳へ古事記には志幾と傳へたりければ
てもとより名さる違ひたるにもあらねどまして土人
の口碑にも白鳥陵なるよしいはゆるかゝる傳へなれ
ばいはゆる疑ふべくもあらずなんはあるを軽墓と
しもなづけたるはなほさてこれらの人もこの軽の

文字によれる皇子皇女たちの御墓なるべくおも
ひなさるゝと御名に軽の文字の附き給へるは孝
德天皇文武天皇の二柱と允恭天皇の御子木
梨軽皇子と軽大娘皇女とのみなるを孝德天
皇の御陵は延喜式に大坂磯長陵云々在河内國
石川郡とありて文武天皇の御陵は延喜式に檜
前安古岡上陵云々在大和國高市郡とありて
其在所いはゆるはだかなれば何處をか覓むべ
き木梨軽皇子はまだなりぬ御ふるまひによりて
て自殺し給へるよし 一に伊豫國に流しかへるとも見えたれば

厚く葬り奉りけりとも、かゝる盛大なる御墓の
出来ぬへくもあらねハ、軽大娘皇女ハ伊豫國に
流されたまひけれハ、かの河内國に御墓のあるへき
にあらねハ、かたかたさる事也。日本紀仁徳天皇の六十
年の條に、差白鳥陵守等充役丁時天皇臨役
所爰陵守目杵忽化白鹿以走於是天皇詔之曰
是陵自本空故欲除其陵守而甫差役丁今視是
怪者甚懼之無動陵守者則且授土師連等とミ
えたる詔命なとによりて空陵としもいひそめ
けるなるをまて、それを言便にカルハカといひなし

しまて遂に村名にも負せしものなるへし。但
この詔命にハ、陵をの國のとも詳かならねど、河内國
なる白鳥陵をいへるにて、大和國のなるならぬとハまた
より疑ふへきにもあらねハ、日本紀仲哀天皇の
元年の條に、詔群臣曰朕未逮于弱冠而父王既
崩之乃神霊化白鳥而上天仰望之情一日勿息
是以冀獲白鳥養之於陵域之池因以観其鳥欲
慰顧情則令諸國俾貢白鳥といへることみえた
るもあれハ、大和國伊勢國のみにハあらて、その墳墓
の四周の隍にて養しめ給ひしものなるへきその隍

のよの敷地より見ハいかて廣くまゐしゆるにて自
志のはとらまてるか、さハ軽墓ハカラハカの言
便にてまなすち白鳥陵なることまぬらとに疑な
きものなり然るを河内志に在古市村云と陵上
有祠称伊岐宮とことるも誤なり其は社地の
なきなるをウヘン堂とよくるハ西淋寺一名古市寺の
上の堂のなりし跡にてもいよし陵地にはあらす
弘安四年に下されたる西淋寺寺邊にて狼籍を
するを禁をとゞめられし太政官符に東限大川
志寺壹町北限山陵志寺壹町とこえまく四至

の内にて殺生することをとゞめられし條にも
北限譽田陵とみえて この然ウヘン堂の地は應神
天皇の御陵の南二町許になりけり この故其地の東
二町餘に塔の礎石なと猶存りけれハいよく西
淋寺の舊跡なることいちしるし まつ 土人の口碑
をきくに この然伊岐宮はもと丹南郡野々上村の
南なる伊岐谷といふ所にありしを後にこのウ
ヘン堂の地に移しゝなりとなむいへとしかいふまさし
き傳説なきはかの伊岐宮ハもとよりウヘン堂
の地にありけんものなるべきを 明けくはし其ウ

ヘン堂の地ハ白鳥陵の地ならさることも明なる
いと明らかなりけし

右註管見上申如件

明治十三年十二月

宮内五等属大澤清臣（印：大澤）

宮内七等属大橋長憙（印：大橋）

九年四月八日回　大村忠彦（大村）

諸陵課

輔（宍戸）丞（鈴木）（足立）（土持）

堺縣下大和國琴引原白鳥陵之儀ニ付

正院ヘ伺議案

白鳥陵ノ義河内國舊市御遺蹟ハ已ニ御決定御指令相済候處大和國琴引原ハ未タ御治定不相成依テ正院ヘ御伺有之テハ如何

正院ヘ伺案

日本武尊白鳥陵ノ儀大和國琴引原弁ニ河内國舊市邑両所ハ日本紀ニ相見ヘ則舊市ノ分ハ

大和國琴引原白鳥陵勘註

河内國古市村ニ決定相成候處琴引原ノ分ハ未定
候得共大和國葛上郡富田村ノ權現山無相違
御實蹟ト相聞エ候ニ付勘註繪圖面等相添
此段一應相伺候也

輔

太政大臣宛

追テ本文御場所確定ノ上ハ例規之通墓掌丁
差置取締爲致候儀ニ有之候條此段爲念申
添候也

總テ伺ノ通
明治九年五月九日
太政大臣三條實美印

大和國葛上郡富田村

白鳥陵

書紀景行巻四十年夏六月東夷多叛冬十月壬子
朔癸丑日本武尊發路之(中畧)遠于能褒野而痛甚之
云々既而崩于能褒野時年三十天皇聞之云々即
詔群卿命百寮仍葬於伊勢國能褒野陵時日本武
尊化白鳥從陵出之指倭國而飛之群臣等因以開
其棺櫬而視之明衣空留而屍骨無之於是遣使者
追尋白鳥則停於倭琴彈原仍於其処造陵焉白鳥
更飛至河内留舊市邑亦其處作陵故時人號是三

陵曰白鳥陵然遂高翔上天徒葬衣冠因欲録功名
即定武部也是歳天皇践祚四十三年焉
古事記自其幸行而到能煩野之時思國以歌曰云
々此時御病甚急爾御歌曰云々歌竟即崩爾貢上
驛使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵即
匍匐廻其地之那豆岐田而哭云々於是化八尋白
智鳥翔天而向濱飛行爾其后及御子等於其小竹
之苅杙雖足䠊破忘其痛以哭追云々故自其國飛
翔行留河内國之志幾故於其地作御陵鎮坐也即
號其御陵謂白鳥御陵也然亦自其地更翔天以飛

行
紀記ニ記サルヽ所右ノ如クニテ日本紀ニハ
大和ノ琴引原ト河内ノ舊市ト二所ヲ挙ゲ古
事記ニハ河内ノ志幾（即古市也）ヲノミ挙テ琴引原
ハ漏タリ此ハ日本紀ノ傳ノ委シキニ依ルベ
キヿ論無シ
○大和國琴引原御遺蹟ハ大和志葛上郡部ニ
琴引原在富田原谷二村間ト説ヒ白鳥陵ハ在富
田村今称ス天王山トト見エ谷森善臣ガ蘭笠之雫
ニモ何クレト論ヒ置ル事ドモアリ明治六年

五月臣等巡回ノ時土人ニ嚮導サセテ件ノ富田村ニ至リ實地ヲ撿スルニ村ノ北後ニ上之段ト云所ニ權現山トモ天王山トモ称スル小山アリ頂上ハ後ニ引平シタル物ト見エテ其ノ形狀全備セザレ共古墳ナルヿハ疑無シ頂上東向ニ小祠アリ（此ノ小祠ハ後世里民ノ私祭ナルヿ論無シ此祠ヲ設クル時墳上ヲ引平シタルモノナルベシ）白鳥權現ヲ祭ルト云祠ノ後五間許離レテ神木ト称シテ槻ノ大老樹一株アリ土人ノ語ルヲ聞クニ先年當村ノ住民上原宗七郎ト云者此神木ノ根ヲ伐ラントシケルニ

大キナル黒蛇出現シタルニ驚テ家ニ逃歸リシニ忽チ發病シテ死セリ往昔ヨリ里民境内ヘ入ルヿヲ憚ルタマタマ立入ル者アレバ不思議ノ事ドモアリトテ甚ク恐レ惶メリ又此ノ權現山ヨリ三町許距リテ東北ノ方低キ地ニ分銅山ト称スル一丘アリ此モ頂上ハ引平シタレド古墳ナルヿハ瞭然タリ又權現山ヨリ東ノ方三町許距リテイト大キナル古冢ヲ御茶山ト呼ブ例ノ前方後円ニシテ埴輪多クアラハル後円ノ頂上深サ五尺許クボミタリサ

テ此分銅山ノアタリヲ今モ琴引原ト云サテ允恭天皇紀四十二年十月ノ下ニ新羅弔使等喪禮既闋而還之爰新羅人愛京城傍耳成山畝傍山則到琴引坂顧之曰宇泥咩巴椰彌彌巴椰トアル琴引坂ハ何処ナラント云ニ富田村ヨリ未申ノ方凡五六町許距リテ室村ノ鉢伏峠ト云所ノ坂路ヨリ畝傍山耳無山遠ク見渡サル、ヨシ土人等説ヘリ然レバカノ新羅使ノ越タル琴引坂ハ即チ此ノ鉢伏峠ノ坂路ナルヿ疑無シ又権現山ヨリ戌亥ノ方三町許距リテ池

之内村ト云アリ竊ニ思フニ仲哀天皇紀元年冬十一月詔羣臣曰朕未逮于弱冠而父王既崩之乃神靈化白鳥而上天仰望之情一日勿忘是以冀獲白鳥養之於陵域之池因以覩其鳥欲慰顧情則令諸國俾貢白鳥コレハ能褒野カ古市カ琴引原カ決ナラザルガ如クナレド同紀同年閏十一月越國貢白鳥四隻於是送鳥使人宿菟道河邊云々トアルヲ思フニ能褒野ナラヌヿハ著明シ然レバ古市琴引原両所ノ内何レナラムト云ニ今此ノ池之内村ノ名ヲ以テ思フ

ニ白鳥ヲ粮ヒタマヒシハ恐ラクハ此ノ琴引原ニテ池之内村ハ即チ其遺蹤ナルベク考ヘラル此ハ試ニ云ノミ（御茶山ト分銅山トノ間ニテンカイノ池トテ今モ小キ池アリ）

○臣等謹按ルニ琴引原琴引坂右ノ如ク確乎トシテ現存セル上ハ白鳥陵ノ御在所モオノヅカラ明ラカナルガ如シ然ルニ上ニ説ヘル如ク権現山（一名天王山）分銅山御茶山ノ三丘何レモ古墳ナル中ニ何レカ真ノ白鳥陵ナラン考ヘ奉ランヿ甚難キニ似タリ谷森善臣ハ御茶山

ヲ心引ク方ニ論ジ置タレド土人ハヒタブルニ権現山ヲコソ真陵ト心得タレ分銅山御茶山寺ハ更ニ舎テ論ゼザル也臣等按ルニカノ権現山一名ヲ天王山ト称シテ（善臣ノ蘭笠之雫ニ権現山ト天王山トヲ別処ノ如ク思ヘルハ捜索ノ疏カリシ也惑フベカラズ）頂上ニ白鳥権現ノ祠アリ祠後ノ大老樹實ニ千年ノ面影アリ又此権現山ノ在ル所ヲ富田村ト云モ少縁ノ事ニアラズ其ハ古事記傳ニ伊勢國鈴鹿郡ナル石薬師ノ寺ヲ高富山ト號ク高富ハ高飛ニテ此アタリノ舊名ニテ石薬師驛モ旧名高

飛ト云リ其ハ倭建命ノ白鳥ト化テ飛去坐シヨリ起レル名ナリト云傳フ又神名帳朝明郡ニ鳥出神社アリ或説ニ是レ倭建命ノ白鳥ト化テ飛出タマヒシ地ナル故ニ鳥出トハ云也今ハ此アタリヲ富田ト云ハ登理傳ヲ訛レルナルベシ大和國ノ琴引原ノ地ヲモ富田ト云ル同故事ニテ同名ナルヲ思フベシト説リ石薬師驛ノ旧名ヲ高飛村ト云シヿハ文禄三年ノ検地帳ニ見エタリトゾ然ハ云ヘ此レ等ヲ以テ實地ノ證トハ説カタキニ似タレド御茶山分銅山ニハ祠宇モ無ク大樹モ無ク土

人ノ傳説モ聞エザルカラハカノ権現山ヲ真陵ト定メラルヽノ外無ルベク考ヘ奉ラル尚別紙實地檢查ノ圖面ヲ以テ了知アランヿヲ冀フ

○陵上ノ小祠ハ神社明細帳富田村ノ部ニ白鳥社祭神日本武尊神殿梁行壹尺四寸桁行壹尺二寸向拜八寸社地十間四方除地祭日毎年八月十五日ト記セリ元来村民私祭ノ祠ナレバ取除クベキヿ勿論ナレド年来在リ来レル社ナレバ御在所ヲ除テ兆域中便宜ノ地ニ點シテ保

存セラレンヿ穩當ノ御所置ナルベキ歟

右大和國琴引原白鳥陵實撿勘註如件時習等再
拜頓首謹言

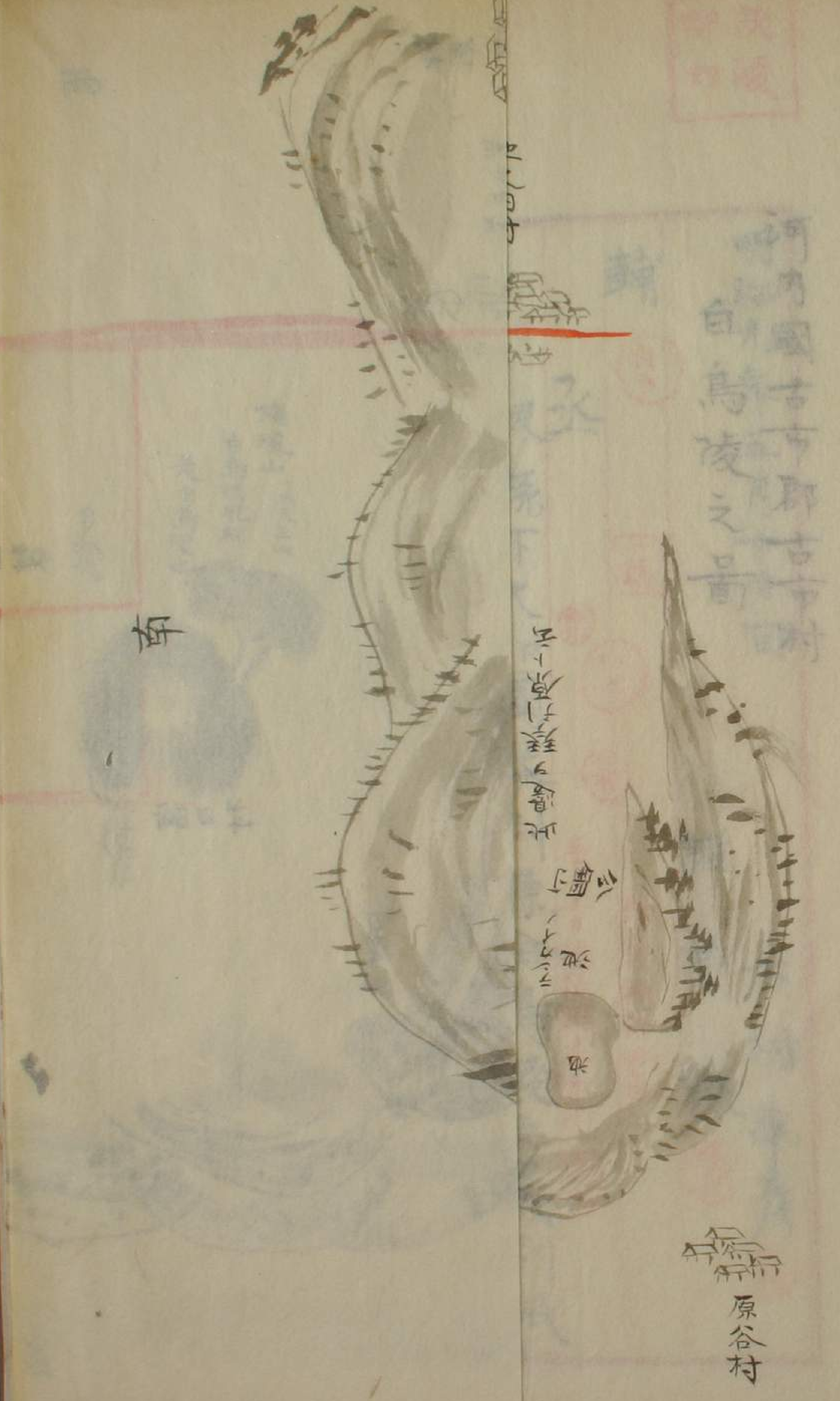
明治七年六月

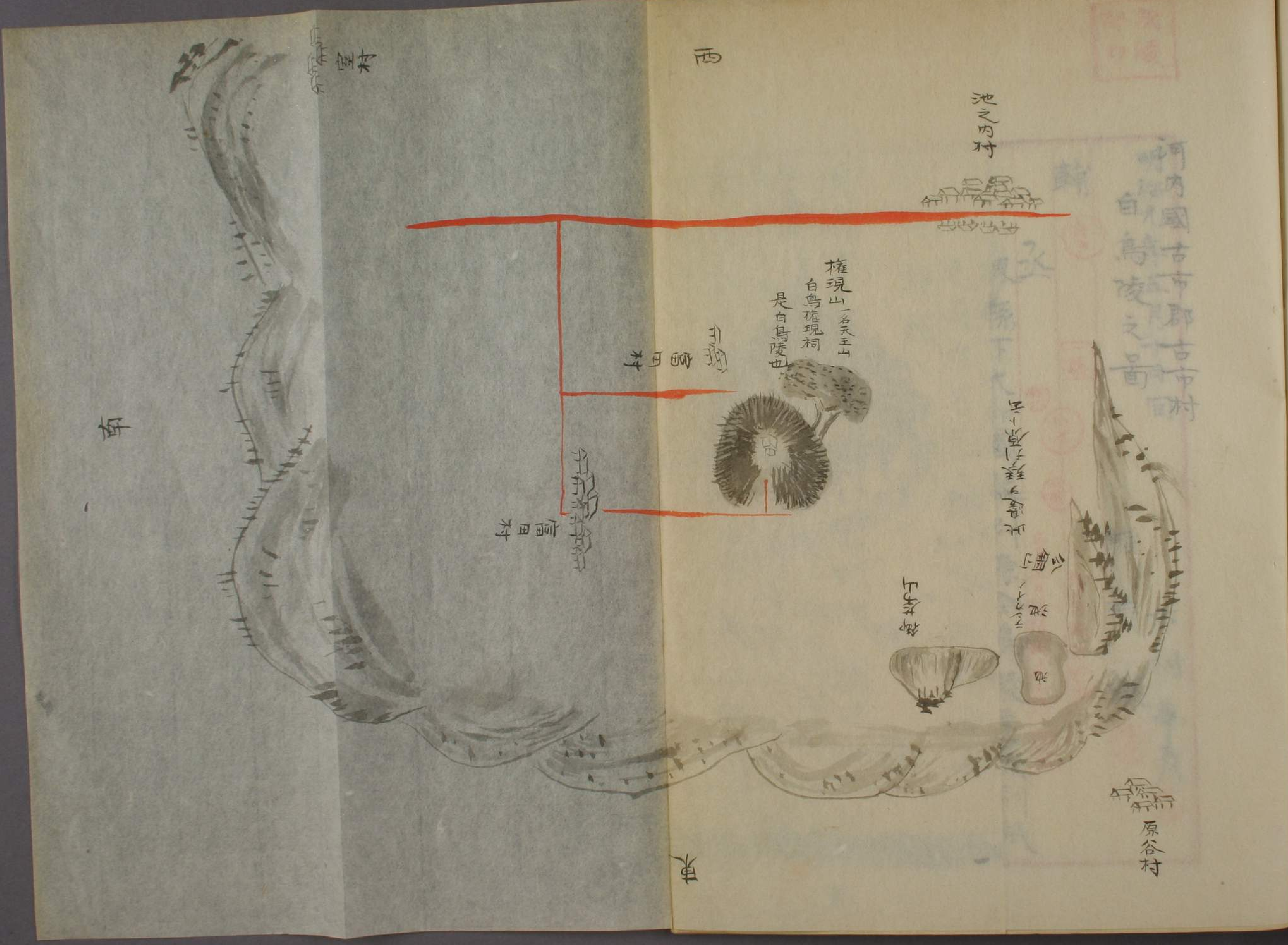
少録中島秉彝

權中録子安信成

權大録猿渡容盛

大録山之内時習


南
池
原谷村


西
池之内村
權現山一名天王山
白鳥権現祠
是白鳥陵也
南
東
原谷村

諸陵寮印

河内國古市郡古市村
白鳥陵之圖

明治九年五月十日回

輔

丞

諸陵課　大村宰彦

限縣下大和國□□□□白鳥陵□□□□紙

河内國古市郡古市村
白鳥陵之圖

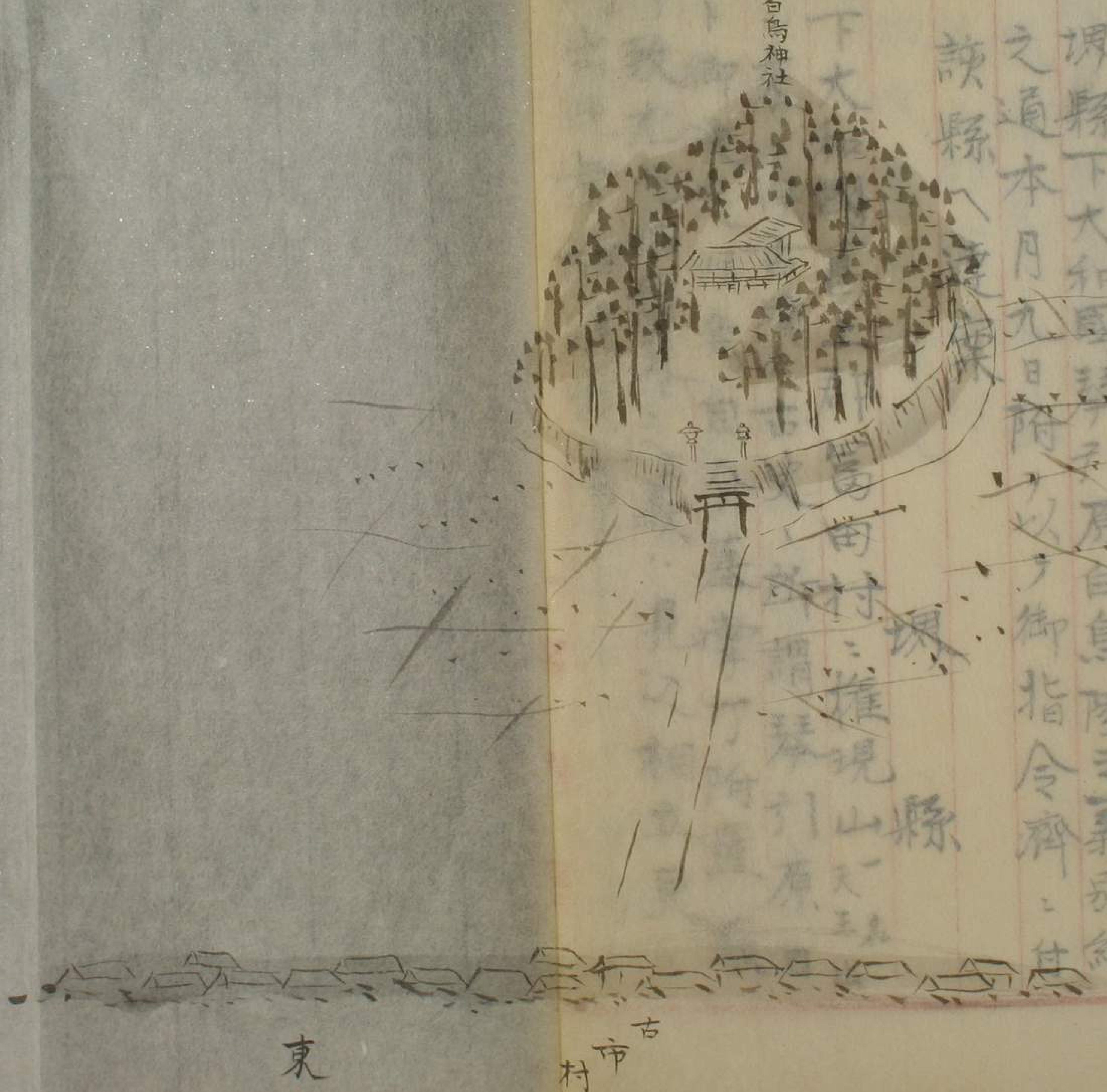
輔

丞

諸陵課 六村中彦

堺縣下大和國琴引原白鳥陵之義別紙
之通本月九日附ヲ以テ御指令濟ニ付
該縣ヘ達ノ課

其縣下大和國……



諸陵課印

明治九年五月十日回

六村中彦

輔　　　　諸陵課

即日施行　津田

五月十一日往復課處分済　海江田

丞

堺縣下大和國琴引原白鳥陵之義別紙
之通本月九日附ヲ以テ御指令濟ニ付
該縣ヘ達案

堺縣

其縣下大和國葛上郡冨田村ニ權現山一名天王山
ト稱シ來リ候古墳ハ古史ニ所謂琴引原白
鳥陵ト御決定候ニ付自今墓掌丁附置取
締可致尤兆域經界之義ハ見込相立更ニ
可伺出此旨相達候事

宮内省

河内國古市郡古市村

白鳥陵之圖

但取締之義ハ最寄掌丁ヲ以テ兼務為
致人名可届出候事

至急

諸陵寮印

九年五月十七日回

諸陵課　大村中彦

大和國吉野郡今木村
境黒彦皇子御墓
同國葛上郡富田村
日本武尊白鳥陵

右二ヶ所先年巡回検査相済候処地理不審
之廉有之候間今般畿内巡回之者出張先
キ申遣シ今一應實地取調致サセ度付テハ
右都合ニ依リ巡回日数モ相増シ候半ト

相考候条此段併テ相伺候也